



# 境界あれこれ

## 2

### ～親の呼び名が変わる境界は？～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

#### はじめに

親の呼び名は色々である。「お父さん、お母さん」「とーちゃん、かーちゃん」「おっとー、おっかあ」「とと、かか」「父上、母上」「お父様、お母様」「おとうちゃま、おかあちゃま」「おとん、おかん」「おやじ、おふくろ」などは日本語での一般的(?)な呼び名である。おそらく、日本語ほど親の呼び名の種類が多いところはないのではないかと思う。そこに外国語も入ると「パパ、ママ」「ダディ、マミー」「ダド、マム」「ファーザー、マザー」「ファーター、ムッター」など多種多彩である。

ベネッセの高校生以下の調査では以下の通り。

- ・お袋(おやじ) ……0.2%
- ・ママ(パパ) ……39.8%

- ・お母さん・お母ちゃん(お父さん・お父ちゃん) ……52.2%

- ・名前+さん・ちゃん ……1.5%
- ・あだ名 ……1.9%
- ・その他 ……4.4%

一体こうした呼び名の変化はどの様になっているだろうと、ふと思った。そこで、ちょっと考えてみたい。

#### 呼び名の変化

ドラマなどで、上流階級(?)と目される家族が出てくると、大人になっている子どもたちが、「お父様、お母様」などと呼んでいるのを聞く。これは別におかしなことではない。

自分の親に対し「父上、母上」と呼ぶのは今時、時代劇でもなければ出てくることはない。しかし今も、お手紙などで、「お父上はお元気でいらっしゃいますか？」などと書く。文章語としては今も使われている。

筆者が幼少の頃は「お父様、お母様」と呼ばれるところが、省略形というか「おとーま、おかーま」と呼んでいた。その後中学生くらいから、「お父さん、お母さん」になり、その省略形の「とーさん、かーさん」も含め、ずっとそのまま父母が祖父母になるまで続いたと思う。

我が家では、最初は「パパ、ママ」だったものが、中学校くらいから、「ねえ」「ちょっと」となり、その後名前やあだ名（筆者は幼年故、ウマ）で呼ばれるようになった。

相談で会う子どもたちを見ていると、小学生は基本「パパ、ママ」で、中学校2年くらいの丁度反抗期に呼び名が変わるように感じる。直接的には呼ばず、我が家の子どもたちのように「ねえ、ちょっと」とか「おい」とか言っている。

アメリカの友人たちに聞くと、段々名前で呼ぶようになる家が多いという。日本でも名前で呼ぶ家がある。

家によって全く異なるが、なぜ途中から呼び名を変えたり、名前で呼ぶようになるのだろうか？

それは思春期が進んで、親に対し対等または親を乗り越えようとする気持ち、自分はもう赤ちゃんではないという主張なのではないか。思春期になると、親に対する反発やイライラ感から、親に対し酷い態度をとったりする。その中の一つの表現として、親の呼び名も変わっていく。「ねえ」とか「ちょっと」とか、むしろ呼び名さえ使わなくなるのも、そうした態度の表れだろう。

もっと大人になってからであれば、対等な立場として名前に「さん」を付けて呼んでいる人にも会う。子どもも自立した大人となっていれば、親に対し「さん」付けで呼ぶのは自然だろう。

親の呼び名は地域によっても異なるとは思いますが、子どもが親をどう呼ぶかは、やはり親同士の対応によっても違う。つまり、母親が父親のこと

をどう呼ぶかが大きく影響する。

母親が父親のことを「パパ」と呼び、何かにつけて「パパのところに行ってごらん」「パパ帰ってきた」などと、「パパ」という言葉を聞くチャンスが多ければ、子どもは最初に「パパ」を覚えて、母親は「面倒見ているのはママなのに、なんで『ママ』が出ないの？」とショックを受ける。しかし、パパが「ママ」と呼ぶ回数より、ママが「パパ」と呼ぶ回数が圧倒的に多ければ子どもは最初に「パパ」を覚えるのは当たり前だろう。そう説明することで母親は納得である。こうやって「パパ・ママ」を覚え、子どもが成長し、中学生になっても母親が父親のことを「パパに聞いてごらん」というように「パパ」と呼んでいけば、子どもは自然に「パパ」を使うだろう。子どもが大人になっても使っていればそのままかもしれない。

しかし、ある程度子どもが大きくなったところで、「お父さん・お母さん」に変えれば、子どもの呼び名も変わるだろう。

まあ、家の中でどう呼んでいようと個人の勝手であり、余計なお世話ともいえる。

ただ、人前で自分の親をどう呼ぶかは家の中の事情とは異なるのではないか。大人になってもテレビなどでタレントが「うちのママは・・・」などと言っていると、違和感がある。結婚式に親への手紙を読むこともあるが、そういう手紙でも「パパ、ママ」で始まると、大人としてどうなのかと思う。

高校生以下の子どもたちの調査（ベネッセ、2009年）では、家の中と外で親の呼び名を変えているのは、約16%だそうだ。中・高校受験の面接練習で「パパは～」などと言え、注意を受け「父は～」というように指導されるだろう。つまり人前では自分の親を「父・母」と呼ぶことが、暗黙の了解となる年齢は小学校高学年以降ということになるのではないか。そして、それをわきまえるということは家の内と外の境界を意識できるようになるということでもあるだろう。

アメリカの友人たちも、「お父さん、お母さん」

というような感じで「Father・Mother」を使うことがあるが、人前ではやはり「my father/my mother」と呼ぶのが普通である。諸外国でも、基本的には家で呼ぶ名と第三者に対していう場合は異なる。

スペインでは父親はパパー・パピ、母親はママ・マミと呼ぶ。第三者に対しては、「父・母」はパドレ・マドレになる。フランスでは父親はパパ（P）母親はママ。第三者に対しては「父」はパール、「母」はメール。イタリアでは父親はパーバ、母親はマンマ。第三者に対する「父」はパドレ、「母」はマドレ。ロシア語では父親はパーバ、母親はマーマ。パパーシュカ、パパーシャ、ママーチカ、ママーシャと呼ぶこともある。第三者に対する「父」はアチェーツ、「母」はマーチ。中国語では、父親はパパ母親はママだが、かつては父親がディエー、母親がニャーンだったので日本と同様時代ともに変化しているようだ。そして第三者に対しては父はフーチン、母はムーチンだそう。韓国語では父親はアッパ、母親はオンマ。第三者に対しては「父」はアポジ、「母」はオモニ。親元を離れたら、この呼び名になるようだ。

このように全世界でも、第三者に対して自分の

親の呼び名は、通常の呼び名とは異なる。ということは、日本でもきちんとそのようにすべきだろう。韓国のように生家から離れたらというような境界がはっきりしていると助かるが。

親同士が名前で呼び合っていて、子どもが名前で親を読んでいる例にも出会ったし、親同士があだ名で呼んでいて、子どももそれに準じている例もあった。親の呼び名次第で、子どもの呼び名が変わるのであれば、親は呼び名に気をつけねばならないし、親自身も人前で自身の親のことを話すときに、「父・母」と呼ぶような、見本をきちんと示すことも小さいことかもしれないが大事なのではと思う。

同時に、子どもの呼び名も、大きくなって「○○ちゃん」と呼んでいるのもどうかと思うし、子どもに対し「バカ○○」などと呼ぶようでは問題である。親にとっても子にとっても、お互いに尊重しあえば、自然に呼び名も変わってくるだろう。少なくとも思春期を境に、呼び名を変えること、人前での呼び名も同時に変えていくことが必要であろう。日本語の文化としてこのように継承していくことも、また大事なのではと思う。